# 原発問題を考える

## ――教化学の視点から――

齋藤宣裕

## 一．はじめに

昨年三月十一日の東日本大震災によって起こった福島第一原発の過酷事故により、福島県内を中心として現在も多くの地域で厳しい状況が続いている。子どもたちを中心とする健康に関わる問題、放射性廃棄物の問題、原発労働者の問題、廃炉をどのように進めていくのか、放射能汚染によって故郷を離れている方々へ今後どのように対応していくのか。さらには今後の日本の原子力政策の行方等々、問題はまさしく山積している。そして残念なことに大震災から一年半が過ぎた現在でも、震災からも原発事故からも復興が進んでいるとはとても言いがたい状況といえよう。

そのような中、世論では「反原発」「脱原発」といった声が多く聞かれるように思う。しかしながら本年五月にすべての原発が停止した直後の六月に、福井県の大飯原発が再稼働を決定し、七月からは送電を開始している。再稼働は多くの批判を集める一方、電力不足による経済、あるいは日常生活への影響を主な理由として半ば強引に進められた。たしかに我々はもはや電気を使わずに生活することはできないし、原発関連企業で働く方々、原発立地自治体にとっては大変な問題であることは想像に難くない。しかし野田政府は去る九月十四日に「革新的エネルギー・環境戦略」を決定して二〇三〇年代までに原発ゼロを目指すとした一方で、安全が確認されれば再稼働を認め、青森県の大

間原発では建設工事を再開、さらに使用済み核燃料を再処理し、取り出したプルトニウムやウランを原発の燃料として再利用する、いわゆる「核燃料サイクル」についても継続を表明、原子力関連技術の輸出には積極的に取り組むといった、明らかな矛盾が見られる。

そのような状況の中で、我々は宗教者として、また日蓮宗教師としてこの問題にどのようなスタンスをとり、今後どのように行動していくべきなのだろうか。

## 二、宮澤賢治の考える宗教と科学

昨年の平成二十三年度中央教化研究会議は「宮澤賢治と復興の教化学」をテーマに掲げて開催された。賢治は『農民芸術概論綱要』の中で「宗教は疲れて近代科学に置換され然も科学は冷く暗い[①]」と述べ、また、賢治が開設した羅須地人協会で開かれていた集会への『集会案内』の中には「われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学をわれわれのものにできるか[②]」という表現が見られる。明治時代以降、科学は万能のものであるとして人々からいわゆる「信仰」を集めた一方、宗教は「非科学的」とされ科学よりも劣った存在とする動きがあった。それまで宗教が担ってきた、人々を豊かに、幸せにする役割は科学にとって代わられたが、その科学もまた人の心を救う存在ではなかったというのが賢治の言葉であろう。そこで賢治はどのようにして科学を温かく明るい存在に変え、そして宗教を再び輝かせることができるのかを生涯を通して考えていたのではないだろうか。

## 三、『文明の災禍』

本年の中央教化研究会議では哲学者である内山節氏の基調講演が行なわれた。内山氏の著書『文明の災禍』には、今回の福島第一原発事故は「文明の災禍」と呼べるものであった、ということが述べられている。

そしてこのことが、今日の文明の問題点のひとつを示している。それは文明が人間の自然的能力の限界を、はるかに超えてしまったということである。その意味で私たちは、恐ろしく危険な社会をつくりだしてしまった。それが現代である。そして人間の自然の能力の及ばないものが事故を起こし、暴走する。現代文明の産物が事故を起こし、暴走したと言ってもよい。だから、その意味で、福島原発の事故は文明の災禍なのである。[3]

地震・津波の災害はまさに自然の災禍であるが、この原発事故は文明によって引き起こされた「文明の災禍」であると述べている。我々はなぜこのような原発というものを生み出してしまったのか。それは言うまでもなく、経済優先、科学至上主義、合理性の追求といった考えによって生み出されてしまったものであろう。これもまた先ほどの宮澤賢治の言葉を借りれば「科学の冷く暗い」部分と言える。

さらに内山氏の同著には

現代文明は新しいかたちで死を諒解する構造を作り出さなかった。なぜなら現代文明は生の饗宴として展開したからである。それでは生と死のつながりの諒解など形成しようもない。これから私たちは、いったい何に敗北したのかをとらえなおさなければならないだろう。原発に象徴される文明が敗北の原因を作り出していることは、いまとなっては言うまでもなくなった。最終的にどのような結果をもたらすのかさえわからない、放射性物質の飛散という現実を抱えて私たちは生きていくしかなくなった。現代文明はしのびよる死、侵入してくる死を人々にもたらすようになったのである。

だがそれだけが現代文明の敗北ではない。死を諒解する構造を失ったこと自体の中にも、現代文明の敗北は存在している。[4]

とある。原発事故により、地震と津波という「自然の災禍」に「文明の災禍」という性格が加えられてしまったが、現代文明の敗北はそれだけではなかった。現代においては「死」という概念から目を背けて、言わば「生の饗宴」というとおりの暮らしを続けて、文明の恩恵を受けてきた。そして再び、その文明によって「死」や自然の活動への恐怖を思い知らされることになった。このことも含めて文明の敗北と言える。誰にでも当たり前に訪れるはずの「死」へ目を向ける、という部分を担ってきた宗教は、賢治の言うとおりすっかり疲れているのかもしれない。

さらに内山氏は次のようにも述べている。

> 今回の大災害は現代文明のみなおしを私たちに求めている、という人々がいる。私もそのとおりだと思う。だがそのみなおしは、原子力発電について考え直すとか、肥大化した欲望の社会をつくり変える、効率や利益の拡大だけを追いつづけていく社会を変える、というようなことだけですむ課題ではない。もっと根源的なものが、その奥では問われているのである。[5]

いわゆる節電であったり、あるいは仏教的には「少欲知足」であったり、今はそのような現代文明のみなおしがされようとしている。しかし、はたしてそれだけでよいのだろうか。今回の大震災、原発事故の問題を契機に、私たちにはもっと考えなければならないこと、そして教師として伝えていかなければならないことがあるのではないだろうか。

## 四．原発問題を考える

ここで今回の原発事故に対する宗教界の動向を見てみたい。様々な宗派、教団から声明文などが出されているが、

それらを見てみると、どの主張も多少の違いはあれども、共通点が多いように思われる。まずはやはり「反原発」「脱原発」を主張している点。原発に反対する理由として「生命の尊重」を挙げている点、そして、今後についてはいわゆる「少欲知足」を薦めている点、無常を説いている点である。つまり現時点ではそれぞれの宗派、あるいは教団ならではの教義・教学的観点からこの原発事故を捉えるということはなされていないように感じられる。

国際日本文化研究センター教授で東京大学名誉教授である末木文美士氏は、その著書である『現代仏教論』の中で

原発事故があって、日本の仏教者たちが盛んに脱原発を言い出しているが、世間の後追い以上の独自性はほとんど見られない。原発ができた頃は、原子力の平和利用ということで、仏教者たちも後押しして、高速増殖炉に「もんじゅ」、新型転換炉に「ふげん」の名を与えた。戦争中には戦争協力の第一線を担い、戦後になればいち早く懺悔して平和を叫ぶ。原発の場合もまったく同じだ。

（中略）

だが、仏教の特徴はそのようなご都合主義、日和見主義にしかないのであろうか。[6]

と指摘している。仏教者が原発について主張をするにあたり、震災と原発問題をどのように捉え、その上でこれからどのように行動していくべきなのか、一度立ち止まってしっかりと考える必要もあるのではないだろうか。末木氏は

大震災に対する仏教者たちの発言を見ていると、ほとんど震災は自然現象であり、人間の力ではどうしようもないことだ、という、あきらめ的な言い方が多い。世間は無常であり、大自然の災害は防ぎようもない。それなのに、人間は欲望を肥大させ、何でも意のままにできるかのように思い上がってきた。少欲知足に甘んじることが大事だ、

というお説教に行き着く。

だが、その程度のお説教ならば、別に仏教を持ち出すまでもない。災害は自然現象だから諦めるしかない、と言って済ますのは、宗教者としての責任放棄ではないだろうか。こうした当たり障りのない人畜無害のお説教が通用しなくなったのが、今回の震災であり、それに仏教者がどのように答えるのか、ということが問われている。[7]

と述べている。我々に今求められているのは、充分な科学的根拠、経済的論拠を持ちながら、それ以上に、確たる教義的・教学的根拠に基づいた議論である。そこで必要となるのが教化学という考えではないだろうか。日蓮聖人の教えの中に答えは必ずあり、そしてそれを現代にどう活かすか、もしも日蓮聖人が今この世界におられたら、どのような答えを出されるだろうか。

末木氏は次のようにも述べている。

一方に硬直化した宗派の教理があり、他方に教理否定の現場主義がある。いわばそれが、震災が浮き彫りにした日本の仏教の現状のように思われます。はたしてそれでよいのでしょうか。私は両者が結びつけられなければならないと考えます。というか、現場の発想から本当に現実に力のある教理思想を作っていかなければならないのではないでしょうか。[8]

原発問題という現実の問題と日蓮聖人の教学とを別々に考えるのではなく、教学に答えを求めつつ、原発問題に取り組む中から教化を考えていく。そういった姿勢が今、求められているように思う。

大震災以降、死者への供養や復興への祈り、願いなどが注目され、またボランティア活動への評価も含めて仏教界

に世間の目が集まっているとも言える現状において、我々が原発関連企業で働く人や福島の人、これから原発問題と長い年月をかけて向き合っていかなければならない日本中の人々に対して今後どのように行動し教化していくのか。我々もまた問われているのではないだろうか。

---

① 宮澤賢治「農民芸術概論綱要」『校本宮澤賢治全集』第十二巻上（一九七五年　筑摩書房）十頁
② 宮澤賢治「集会案内」『校本宮澤賢治全集』第十二巻下（一九七五年　筑摩書房）一六八頁
③ 内山節『文明の災禍』（二〇一一年　新潮社）三七頁
④ 同上　四五～四六頁
⑤ 同上　九一頁
⑥ 末木文美士『現代仏教論』（二〇一二年　新潮社）三七～三八頁
⑦ 同上　三八頁
⑧ 同上　六九～七〇頁